

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

研究題目	ワイヤー録音によるウイグル古典音楽ムカームの復元研究	報告書作成者	アブドセミ・アブドラフマン
研究従事者	アブドセミ・アブドラフマン、植村幸生		
研究目的	<p>本研究は、1950 年ごろにワイヤー式で録音されたウイグル古典音楽ムカームの音をデジタル再生し、その音源と現行伝承とを対照させることによって、20 世紀前半以前のムカームの様式を復元的に解明することを目的とする。</p> <p>新疆ウイグルの十二ムカームは、歌、舞、器楽が一体となった大型の総合芸術である。現行の十二ムカームは主に 20 世紀前半の民間音楽家、トルディ・アホン（1881-1956）の口頭伝承に基づいて保存されてきたが、1950 年代から現在までの間に、レパートリーの縮小や音楽様式の大幅な改変が行われた可能性が否定できない。一方、1951 年と 54 年にトルディ・アホンが二回にわたって録音を行ったことがわかっているが、このほど、1951 年 8 月の第一次録音のものと推定されるワイヤー録音 50 巻（以下、本資料とする）が新疆芸術学院に保存されていることがわかった。そこで本研究者は 2011 年より、本資料を日本国内で再生し、その音楽様式を考察する研究に取り組み始めた。</p> <p>本研究では、本資料から音声を再生する予備実験の結果と、当時その録音に携わった万桐書氏へのインタビューを通して、この録音の資料的価値を検討し、かつ 1950 年代における十二ムカームの記録および研究の一端を明らかにしようとする。</p>		

## 研究内容

筆者は新疆芸術学院の許可を得て、本資料のうち現在までに、上述の録音ワイヤー50巻のうち、新疆芸術学院に現存する48巻を日本に持ち出し、ワイヤー録音機を所有する日本の技術者、新井幸男氏に依頼して、同氏の自宅(埼玉県川越市)で数回にわたり再生実験を行った。本助成金の期間に再生されたワイヤーは30巻である(ただしワイヤー状態不良により再生を保留したものが数巻ある)。

実験に使用された機器類は次の通りである:ワイヤー録音機 Webster 80-1 (1946年製)、アンプ Muses SRP-200DA、PCM録音機 Sony PCM-D1、PCM-D50。再生された音声はPCM録音され、さらにパソコンを通じて音声ファイルとして保存された。

再生実験の結果、ムカームをはじめ、ウイグル各地の民族の音楽をワイヤーから取り出すことができた。ムカームに関しては次のような楽曲が含まれていることが明らかになった。(仮1、等は実験作業にあたり筆者らがワイヤーにつけた仮番号)

Uzhal muqam dastan (仮1) Uzhal muqam meshrep; Ajam muqam muqademah; Ushaq muqam chong nagma, dastan, meshrep (仮3) Ajem muqam dastan; Nawa muqam (仮7) 不明 muqam muqademah, taeze, Khotan senem (仮8) 不明 muqam (仮9) muqademah; Irak muqam chong nagma, mustakhzad; Ajam muqam muqademah (仮10) Chabiat muqam meshrep; Uzhal muqam chong nagma (仮12) Mushavrak muqam meshrep, dastan; Rak muqam chong nagma, meshrep (仮25) Nawa muqam muqademah, dastan, meshrep (仮27) Mushavrak muqam muqademah, kashgar senem, Kashgar qarghaliq; Uzhal muqam 1-dastan; Mushavrak muqam 2-dastan (仮28) Usshaq muqam mustekhazad, yarimsaqi, nuskhah, kuchik selike, jula, chong selike, pesiro, tekit; Mushavrak muqam muqademah-taeze-nuskhah (仮29)、Rak muqam dastan 1-3; Chabiat muqam dastan 1-4; Usshaq muqam dastan 1-4 (仮30)

さらに、上述ムカーム楽曲以外にウイグル民謡(特にイリ、カシュガル)、他民族(モンゴル、カザフ、タタール、シボなど)の民謡、漢民族の音楽、合唱曲なども録音されていることがわかった。

再生された音声は、再生機の回路、収録時の電力状況、あるいはワイヤーの劣化に起因すると思われるノイズや音のゆれが多少あったものの、全体としては、今後の研究に十分資すると思われる高音質が得られた。現行伝承に照らして考える限り、原音とそれほど隔たらない状態で再生できたと推測される。

一方、筆者は2012年9月にアモイで、このワイヤー録音の作成者である音楽学者、万桐書氏(90才)と連曉梅夫人に面会してインタビューを行い、関係資料の提供を受けた。その結果、1951年当時の困難な録音環境と収録の状況、本ワイヤーの利用・保管状況、などについて貴重な情報を得ることができた。

研究概要報告書【音楽振興部門】

( / )

<p>研究のポイント</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本研究の資料であるワイヤーは、十二ムカームの本格的な録音としては現存最古のものと目される。これを現行曲との比較を中心に音楽的な分析を行うことで、20世紀前半以前のムカームの様式の復元、および現行伝承に至る変化の過程の解明に資する。</li> <li>・本資料の録音者である万桐書氏夫妻が、アモイ市内に生活しておられる。万氏へのインタビューを通して、本資料の成立事情等を明らかにし、本資料の音源資料としての信憑性、有効性を確認することができる。</li> <li>・音源資料から取り出された音を音楽的に分析することで、過去の音楽様式を読み出すという、近年の音楽学で盛んになりつつある研究方法を採用することで、この方法論の有効性と限界を確認することができる。</li> </ul>
<p>研究結果</p>	<p>再生実験の結果と万桐書氏へのインタビューから、本資料が1951年のムカーム整理作業時に録音されたワイヤーであることがほぼ確定したといえる。また、その数奇な来歴と当時の電力状況にもかかわらず音質は良好で、今後の研究に十分耐えると予想される。</p> <p>30巻中9巻には実際にムカームが録音されていることが判明し、それ以外の巻にも、ウイグル民謡、漢民族および他民族の民謡と器楽曲、中華人民共和国成立後の創作曲などが録音されていることが確認された。演奏者名は録音からは判然としないことが多いが、インタビューなどから、トルディ・アホンおよび同時代の著名な演奏家がムカームの演奏を行っていることが推定された。</p> <p>ムカームについては、全体として、録音と現行伝承との間にかかなりの隔りがあるように思われる。たとえば、現行伝承とはいわば異名同曲関係にある楽曲、現行伝承にない部分を伴う楽曲の存在がわかり、比較研究すべき今後の課題が出てきている。</p> <p>本研究の成果は、第十回日中音楽比較研究国際学術会議(2013年3月27-28日、東京芸術大学)において、アブドセミ・アブドラフマンと植村幸生の連名で口頭発表された。</p>
<p>今後の課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・万桐書氏はインタビューの中で、1951年録音に「アビチャシュマ」という楽曲が含まれると証言した。現在アビチャシュマは伝承がなく、その存在を疑う意見さえある。現時点では未発見であるが、今後これを録音したワイヤーが発見されることが期待される。</li> <li>・再生終了後の重要な作業として、取り出された音の採譜、採詞がある。採詞にあたってはチャガタイ語(古典ウイグル語)、ペルシア語、アラビア語などに精通した専門家の協力を仰ぐ必要があると思われる。</li> <li>・技術面では、録音当時の電源周波数は50Hzであったとする仮定のもとに、50Hzで再生してきたが、部分的に、明らかに60Hzで録音したと思われる音が見つかった。この仮定の見直しを含め、当時の電力状況を考慮した再生音の評価が必要である。</li> <li>・将来的には本研究の成果を、ウイグルにおける今後のムカーム伝承へと還元することが求められる。筆者らは今後、本資料に基づく復元演奏の試みなどを通じて、十二ムカームの伝承・教育に本研究の成果を生かす方策を模索していきたい。</li> </ul>